初入選の新しい風

展覧会 改組新第1回日展

◇改組新第1回日展　福岡展　19日まで、福岡市中央区の同市美術館＝092(714)6051。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の計503点を展示。一般1200円ほか。月曜休館。

「改組」「新」「第1回」と重ねて刷新を強調した日展。結果を見ると、二つ大きな変化があった。

一つ目は、日展の運営と活気を支える書の部門で、初入選者が増えたことだ。

書の応募数は近年1万点を超える。今回は千点余り減り、9200点となったものの日展5部門中最多で変わりない。入選はほぼ1割と「狭き門」も変わらないが、それをくぐった943点のうち29%の274点が初入選者の作だった。前回は16%、前々回も16%だから倍増に近い。

二つ目は工芸美術の入選が難しくなったこと。前回は応募の58%が入選したが、今回は796点中396点と50%を切った。この変化を、日展を新たに率いる奥田小由女理事長（工芸美術）は「私から意見はしなかったが、徹底的に厳選していい作品を見せたい、ということ（審査員の総意）だったのでしょう」と説明する。

新しい作家を評価し、常連に奮起を促す。外部の有識者を審査員に加え、顧問の大作家を選任しないといった選考体制の見直しは、文展から数えて107回目となる日展に新しい風を吹き込んだ、と言えるのではないだろうか。

佐藤加奈「悠久の壺」

九州の在住・出身者の作を中心に、5部門で計503点を紹介する福岡展でも、若い担い手が目立つ。

書（漢字）で初入選した北原朴雪(21)は、福岡市出身で大東文化大（東京）の新4年生。東福岡高で学んでいたころから、明・清朝に活躍した王鐸の書風に憧れる。山河をうたう漢詩と響き合うように、一つ一つの文字はやわらかく、空気をはらむ。

日本画では、崇城大大学院（熊本市）の佐藤加奈(24)が、堂々たる量感の作品で初入選。胡粉を塗り重ね、削った絵肌で時間の蓄積を表現しようと試みている。朱、白、金を要にした色の構成もいい。「今はまだ人物は人物、つぼはつぼ、とモチーフを描こうとしているが、絵の中で自分の感情や衝動を表現できるようになりたい」。目標を語る姿が、画中の少女のまなざしと重なる。

奥田理事長は「情実やつながりを断って真の審美眼で審査する体制を作っていけば、本物が残ってくれる可能性がある。2年、3年と若い人たちが続いてこられるようにしなければ」。新風の行方を注視したい。

（南陽子）

2015/04/09　西日本新聞　P12